

北海道から東京都へ移動

12月8日（月曜日） 【ワークショップ】報告会準備（訪日成果のとりまとめ、SNS 発信状況等確認、帰国後の活動計画（アクション・プラン）の作成）

【報告会】訪日成果・帰国後の活動計画発表

12月9日（火曜日） 成田国際空港及び羽田空港より出国

2. 記録写真

プレプログラム（オンライン事前学習）

	
11月25日【来日前オリエンテーション】	11月25日【来日前オリエンテーション】 集合写真

招へいプログラム

	
12月2日【テーマ関連視察】 日本テレビ放送網株式会社 質疑応答	12月2日【テーマ関連視察】 日本テレビ放送網株式会社 集合写真
	
12月3日【テーマ関連講義】 「AI時代のメディアを考える」	12月3日【テーマ関連講義】 「AI時代のメディアを考える」 集合写真



12月4日【表敬訪問】北海道庁



12月4日【表敬訪問】集合写真



12月4日【テーマ関連視察】北海道新聞①



12月4日【テーマ関連視察】北海道新聞②



12月5日【テーマ関連視察】NHK 札幌放送局



12月5日【テーマ関連視察】集合写真



12月5日【学校交流】藤女子大学



12月7日【ホームステイ】歓送会集合写真



12月8日【報告会】



12月8日【報告会】集合写真



12月7日 北海道にて 3か国の参加者の集合写真（マレーシアグループの発表より）

3. 参加者の感想（抜粋）

◆ インドネシア 社会人（ジャーナリスト）

日本テレビへの訪問は、深い感動を残しました。何より心が躍ったのは、大規模なニュースルームを実際に目にしたことです。組織的で、迅速でありながら厳格な規律を持って働いていました。スピードを求められる中でも、ジャーナリズムの倫理を決して犠牲にしない姿勢はとても印象的でした。中でも、放送や配信の前に“手作業で”事実確認を行い、情報を直接検証していることには驚かされました。デジタル時代において多くのメディアが苦勞している“正確性と専門性”への揺るぎない姿勢を感じました。

チームワーク、職業倫理、先見性、そして責任あるジャーナリズムへの献身、そのすべてを目の当たりにでき、とても刺激的でした。情報更新の速度が日々加速していく中でも、ジャーナリズムの核心となる原則を守り続けることの重要性を思い出させてくれました。

◆ インドネシア 社会人（新聞記者）

短期の滞在にもかかわらず、日本の家庭や北海道の現況について、深く理解する機会が網羅されていました。日本の各種メディアの実際の業務についても学びを深め、街に出て散策も楽しみました。このプログラムを通して、参加者は日本とインドネシアの友好を深めるための橋渡し役を果たせたものと考えます。

◆ **マレーシア 社会人（ジャーナリスト）**

倉澤氏の講義では、業界で40年間積み重ねてきた視点や経験、特にAIの動向に関する分析を聞くことができ、とても興味深く感じました。ジャーナリズムには、記者が実際に現場に足を運ぶことが欠かせないという彼の考えに私も賛成です。自らの観察や分析を通じて文脈を整理し、正確に伝えることができるのは人間だからです。AIは、記者の負担を軽減できる一方で、処理の段階でバイアスが入り込む可能性もあります。そのため、記者による検証やクロスチェックは今後も不可欠です。倉澤氏が強調したように、このAIが活用される時代において記者の役割は置き換えられるものではなく、むしろ重要になり、人間だけが真実と価値を見極められる存在なのだと感じました。

◆ **マレーシア 社会人（ジャーナリスト）**

この交流プログラムで最も印象深かったのは、ホームステイでした。ホストファミリーと一緒に過ごすことで日本人の日常生活を観察し、日本人の人生観、性格、価値観をより深く理解できました。

◆ **タイ 社会人（メディア関係者）**

最も良かったのは様々な交流の機会が得られたことです。まず各種メディアの視察（NHK、日本テレビ、北海道新聞等）では、日本のメディアの仕事文化や様々な考え方、例えばAIの導入や日本式のメディア倫理について学ぶことができました。もう1つは、メディア産業に携わっていない日本人、例えば大学の先生や学生、ホストファミリーなどとの交流です。メディア関係者以外の方々との交流のおかげで、人々の生活についてよりよく理解することができ、将来、自分が日本に関するニュースを制作する際、より良いものにしてくれると感じました。

4. **受入れ側の感想（抜粋）**

◆ **視察先関係者**

メディアが直面する課題等について東南アジアの若手ジャーナリストの皆さんと率直な意見交換をできたことは弊社の担当者にとっても大いに勉強になりました。メディアを取り巻く環境が激変する中、どこの国でも同じように手探りで対応策を模索していることを知り、親近感を感じました。

◆ **交流校関係者**

普段、海外で働くプロフェッショナルの方とお話する機会はなかなかないため、学生にとっても貴重な経験となりました。訪日団の方が積極的に学生に働きかけてくれたり、また学生も留学経験者・希望者を中心に声掛けしていたため、とてもよい相互交流ができたと思います。

◆ **交流校生徒**

今回の交流会では、インドネシア・タイ・マレーシアの若手メディア関係者の方々と直接意見を交わすことで、メディアに対する価値観などの捉え方が国によって大きく異なることを実感しました。インドネシア語の通訳と英語を交えながらコミュニケーションを取ったことで、言語が完全に一致しなくても、相手を理解しようとする姿勢が距離を縮めることにも気づきました。

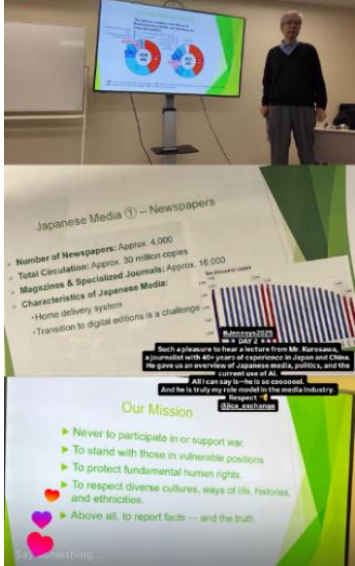
みなさん日本における宗教観についてとても興味を示されていて、改めて日本独特の神様の信じ方について私自身も学ぶ事がありました。また、女子大学ということもあり、みなさんなぜその大学を選んだのかなどたくさん質問してくださって面白かったです。

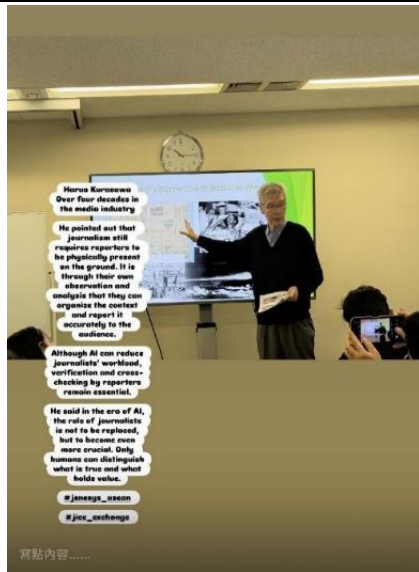
◆ **ホストファミリー**

歴史に興味があるということで、北海道の博物館、資料館では、熱心に資料を読んだり、積極的に質問して理解しようとしたりする姿があり、印象的でした。日頃は英語を使うことのない子どもたちが、これまで学習してきた英語をフルに活用して、交流を深めていく様子に感心しました。

食事は、何が喜んでもらえるかと色々と考えましたが、二人が食べたいとリクエストされたしゃぶしゃぶを作り一緒に食べる事ができました。今まで食べた何よりもおいしいと感動していた事が嬉しかったです。

5. 参加者の対外発信（抜粋）、報道記事等

 Kini berkesempatan untuk melihat dapur salah satu media tertua di Jepang, Nippon TV Network Corporation. Ini suasana kerennya. Rami, sibuk. Pemilik layar. Kata salah satu teman media asal Indonesia, dapur media di Indonesia sebenarnya kurang lebih sama, bahkan 'lebih' dalam beberapa hal. Tapi media ini memang sangat tua. Sudah sejak 1953. Kini berkesempatan untuk berdiskusi dengan petinggi media ini. Kita dan media mengunjungi ruangan yang sama rupanya. Audien senam, pengiklan berbaris, dan media tidak begitu tertarik mengambil profesi jurnalis. Memories pelanggan media media adalah para lansia, baby boomer, gen x, milenial, gen z, apalagi yang di buahnya. Jepang makin memenuh, dan media berfokus penduduknya. Jener media makin jenuh, media sosial jauh lebih populer. Sekarang, program Jenesys ini pun lebih memilih kani menceritakan Jepang lewat video pribadi. Lewat video media yang kani wakili. #jenesys_kani	 Japanese Media ① - Newspapers - Number of Newspapers: Approx. 4,000 - Total Circulation: Approx. 30 million copies - Magazines & Specialized Journals: Approx. 16,000 - Characteristics of Japanese Media: - Home delivery system - Transition to digital editions is a challenge Such a pleasure to hear a lecture from the Japanese, a journalist with 40 years of experience in Japan and China. He gave us an overview of Japanese media, politics, and the current state of AI. All I can say is "he is so honest. And he's back on the model in the media industry. Respect & like, please." Our Mission - Never to participate in or support war. - To stand with those in vulnerable positions - To protect fundamental human rights. - To respect diverse cultures, ways of life, histories, and ethnicities. - Above all, to report facts — and the truth. Nothing...
2025 年 12 月 2 日 (Instagram) インドネシア 社会人 日本で最も長い歴史を有するメディアの一つである日本テレビを訪問する機会が得られました。これは報道ルームの様子です。賑やかで、誰もが忙しく動き回り、たくさんのテレビディスプレイが設置されています。メディア関係の仕事に従事する友人によれば、インドネシアの報道局の様子と似ており、あるいはインドネシアと比べ先進的な面もある一方で、設立が 1953 年と、かなり長い歴史を持つ報道機関の一つと言える、とのことでした。日本テレビの幹部の方を交えての意見交換を通して、双方のメディア関係が抱えている課題は同様にあることを理解しました。視聴者と広告収入、ジャーナリスト志望の若者の数には、顕著な減少傾向が見られます。少子高齢化の日本では、活字メディアの購読者の中心はミレニウム世代や Z 世代の若者ではなく、ベビーブーマーや、X 世代です。メディア業のターゲット市場は停滞の傾向にありますが、その一方で SNS は広く社会に浸透しています。	2025 年 12 月 4 日 (Instagram) タイ 社会人 日本と中国で 40 年以上の経験を持つジャーナリスト、倉澤氏より、日本のメディア、政治、そして AI の現状についてご講義いただきました。まさにメディア業界における私のロールモデルです。尊敬します。



2025 年 12 月 3 日 (Instagram)
 マレーシア 社会人
 メディアの世界で 40 年以上の経験をお持ちの倉澤治雄氏はこう指摘しました。ジャーナリズムでは記者が現場に足を運ぶことが依然として必要です。自分自身の目で観察し分析したことをもとに、内容をまとめ正確に視聴者や読者に伝えることができるのです。AI によりジャーナリストの作業量は減るものの、記者が情報を確認し裏付けを取る作業は今もなお不可欠です。倉澤氏は、AI の時代にあっても AI がジャーナリストの役割にとって代わることはできず、むしろさらに重要になると述べました。真実を見極め、価値あるものを見分けることができるのは人間だけなのです。



2025 年 12 月 5 日 (Instagram)
 タイ 社会人
 北海道最大の地方新聞社である北海道新聞社を視察し、オンラインエディターの仕事の様子や印刷前の紙面レイアウトシステムなどを見せてもらいました。(写真中央)
 1942 年に発行された最初の新聞。当時の紙面は戦争を煽る内容でした (写真左下)。
 入社当時に使っていたフィルムカメラとのことで (写真右下)。



2025 年 12 月 5 日 (Instagram) タイ 社会人 2025 年 12 月、北海道、札幌 ・雪と氷点下 8 度の寒さ、そして強風が迎えてくれました。 ・今月は札幌ホワイトイルミネーションが開催され、たくさんの写真撮影スポットがあり、ロマンチックな雰囲気です。 ・高品質な農産物とおいしい食べ物。牛乳、チーズ、チーズケーキは最高です。 ・訪日前は日本人は静かで控えめで、近寄りがたいイメージでした。今回は、日本人の家庭に滞在する機会に恵まれました。	2025 年 12 月 6 日 (Instagram) インドネシア 社会人 日本で新たに家族が得られるとは想定外であり、まるで我が子のように優しく接して下さる方と JENESYS プログラムが引き合わせてくれました。別れのときは、涙が頬を流れ落ちました。
 Japan has a surprisingly thoughtful way of protecting trees in winter. No plastic, just natural materials and smart design. Sustainable, simple, and so beautifully done. Nice exchange!	 Terima kasih Hokkaido dengan segala hal yang menyenangkan. Kami ingin tinggal lebih lama di sana, tetapi hijrah exchange mengharuskan kami kembali ke Tokyo hari ini. Setelah ini, Thailand dan Malaysia bisa menjadi tujuan berikutnya.
2025 年 12 月 6 日 (Instagram) インドネシア 社会人 冬の季節、寒さに弱い常緑樹をプラスチックではなく、天然由来の素材である、藁を巻いて保護していることに驚きました。見栄えも良く、持続可能であり、単純なやり方で効果が得られるというのは素晴らしいと思いました。	2025 年 12 月 7 日 (Instagram) インドネシア 社会人 北海道、楽しい時間をありがとう。もっと長く滞在したかったけれど、今日は東京に戻らないといけません。 この次は、タイとマレーシアが目的地になるかもしれません。



2025.12.09 「留学・国際交流」
外務省JENESYSプログラムによる若手メディア関係者との交流会を行いました

12月9日（月）、外務省国際交流センター（JICAビル）にて、外務省JENESYSプログラムによる若手メディア関係者との交流会を行いました。交流会は、外務省国際交流センター（JICAビル）にて、外務省JENESYSプログラムによる若手メディア関係者との交流会を行いました。

「JICAビル（JICAビル）」は、外務省国際交流センター（JICAビル）にて、外務省JENESYSプログラムによる若手メディア関係者との交流会を行いました。

交流会は、外務省国際交流センター（JICAビル）にて、外務省JENESYSプログラムによる若手メディア関係者との交流会を行いました。



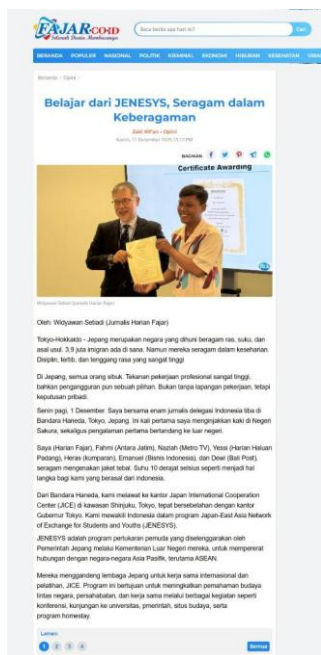
交流会は、外務省国際交流センター（JICAビル）にて、外務省JENESYSプログラムによる若手メディア関係者との交流会を行いました。

交流会は、外務省国際交流センター（JICAビル）にて、外務省JENESYSプログラムによる若手メディア関係者との交流会を行いました。



2025 年 12 月 10 日（インドネシアの新聞「HARIAN HALUAN」）
JENESYS 参加記者が東京や北海道での大学訪問やメディア関係の施設への視察、ホームステイを体験し、日本文化と社会を深く学んだことを時系列に報告。

2025 年 12 月 9 日（藤女子大学のウェブサイト）
「外務省 JENESYS プログラムによる若手メディア関係者との交流会を行いました」



2025 年 12 月 10 日（インドネシアの日刊紙インドネシアの日刊紙「Harian Fajar」のオンライン版「Fajar」よりインドネシア参加者が執筆した記事（アクション・プランの一環）
「JENESYS に学ぶ、多様性と調和」

2025 年 12 月 10 日（インドネシアのデジタルニュースサイト「kumparan.com」kumparanNEWSよりインドネシア参加者が執筆した記事（アクション・プランの一環）
「藤女子大学で学生として過ごす一日」

6. 報告会での訪日成果とアクション・プラン発表（抜粋）

訪問地：東京都、北海道 全3グループ発表

インドネシア



【成果の発表】

◆ 訪日全般の学び：

訪日前は日本では個人主義的な側面が強く見られ、人といっても互いにあまり話すことがないものと考えていましたが、実際に訪れてみると、ホースステイでは会話が弾み、他者への細やかな配慮や温かみを感じられました。

日本人の規律正しさ、整然とした行動様式、綺麗で清潔、ごみ一つ落ちていない街並み、日常生活での先端技術の駆使は予想通りでした。

和食は薄味で馴染みがなく、最初は物足りなさを覚えたのですが、日を追うごとに体が順応し、おいしく感じられるようになりました。

◆ メディアの学び：

- ・ 日本人の規律正しさ、正確さ、集団での責任意識がメディアの仕事に影響していることを直接学びました。
- ・ ジャーナリズムと信頼性の高い標準を維持しながら、視聴者の高齢化に対応していることを学びました。

【アクション・プラン】

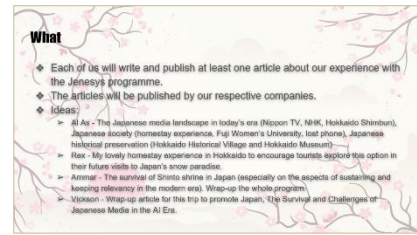
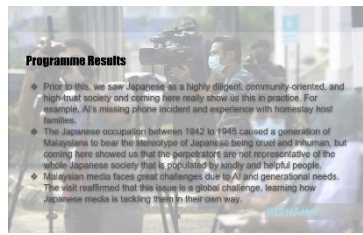
参加者は、それぞれの所属を通して3か月以内に実施する情報を発信します。

具体的内容は以下の通りとなります。その順序は、特集記事の掲載、映像制作・放送、進捗状況の確認と対応等となります。

- ・ ビジネスインドネシア新聞社：日本のメディアと文化の考察に関する特集記事の掲載。
- ・ kumparan.com（ネットニュース）：日本人の気質等に関する記事を写真で紹介。
- ・ メトロ TV 社：日本の紹介番組を制作し、放送。
- ・ HARIAN HALUAN 新聞社：日本の文化、教育、観光に関する記事を掲載。
- ・ バリポスト新聞社：日本の観光や文化に関する特集記事を掲載。
- ・ アンタラ通信社東ジャワ州支社：日本の交通システムや都会に居住する地域住民に関する発信
- ・ Harian Fajar：日本の地方メディアの活力についての特集記事を掲載。

これらのアクション・プランを通じて、インドネシアの市民の関心を向上させ、メディア関係者間の連携強化、有益な内容を有する本プログラムの周知、継続的な協調体制の強化の可能性を探ることを目指します。

マレーシア



【成果の発表】

◆ 訪日全般の学び：

来日前、日本人は勤勉で地域中心、信頼性が高いと思っていましたが、来日後ホームステイ等を通じてそれが本当たとわかり、また、1942 年～1945 年の日本の占領により、日本人は冷徹で残酷なイメージでしたが、来日後ほとんどの日本人は親切で助け合う人々だとわかりました。

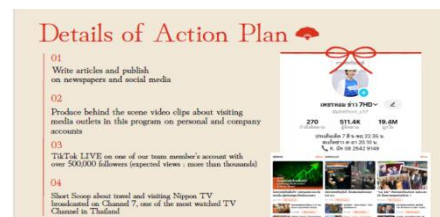
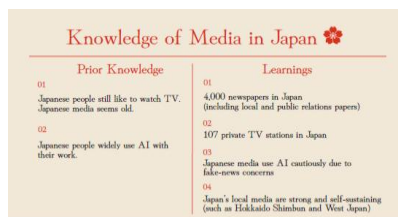
◆ メディアの学び：

自国では AI や世代のニーズの変化が課題で、来日後、課題は世界共通であり、日本のメディアは独自に解決策を探っていることを学びました。

【アクション・プラン】

プログラム終了後 3 か月以内を目途に、各職場で、ホームステイの経験、北海道の観光の魅力、歴史的財産の保護、日本のメディアの現況、AI 時代における日本のメディアの課題と生き残り策、神社等について記事を書きます。

タイ



【成果の発表】

◆ 訪日全般の学び：

来日前に抱いていた堅苦しい日本人のイメージが変わった他、食料自給率の低さ等日本の現実を知りました。

◆ メディアの学び：

タイの新聞に比べて部数も会社数も多くかつ堅固であることに驚いた半面、AI の活用についてはタイと同様の問題意識を持ち慎重に対応していることを知りました。

【アクション・プラン】

- ・ 今回は 5 つの異なるメディアから参加しているため、参加者各自で記事を書く等して SNS その他のツールで、個人や会社のアカウントで発信していくつもりです。
- ・ 参加者 5 人の中に 50 万ものフォロワー数を誇るメンバーもいて、TikTok ライブ等では数千件の閲覧数が期待できそうです。
- ・ タイで最も視聴者の多いチャンネルの 1 つであるチャンネル 7 で、今回の訪日や日テレの視察等を紹介する動画を放映する予定です。

実施団体：一般財団法人日本国際協力センター（JICE）